

▶▶▶加藤 裕治

いま「男はつらいよ」を観て

昨年は、映画「男はつらいよ」の第一作目が初上映された一九六九年から、ちょうど五十年だった。一年遅れだが、浜松のシネマイーラでも先月から、シリーズ全五十作が毎週一作品のペースで上映されている。ちなみに一九六九年は私が生まれた年でもあり、とても気になってしまっ

「男はつらいよ」といえば、渥美清が演じる主人公の車寅次郎、通称「寅さん」が旅する日本の名所景色の美しさや、「おいちゃん」「おばちゃん」、母親違いの妹「おくら」が住む葛飾柴又の人々と織り成す人情喜劇が見どころと言われてきた。

私もこれまで何作か観てきたのだが、正直、すっかり内容を忘れていた。しかし、第一作目から改めて観ると、「こんな話だったのか」と驚いた。ともかく、初期の寅さんは恐ろしく粗暴なのである。一九六九年当時、ある新聞評では「時代錯誤的なイキがり方のおかしさ」とされ、多くの批評家も六作目あたりまでは、かなり「暴力的」だと評している。

だが、粗暴には理由がある。それは、寅さんが自分に自信が持てないことからきている。学もなく、定職もない。その生き方を誇らしげに見せながら、一方ではそのことに疑問を感じ、自分を恥じている。だから「ちゃんと働け」といった社会の常識からとがめられると、悔しさと恥ずかしさから怒りが湧き出てしまう。

しかし、この物語が面白いのは、周りの人々が、そんな寅さんに逆に助けられ、救われるところにある。社会の常識からすれば、何の不足もなく、順風満帆に見える人でも不安や弱さを抱えている。寅さんは、逆にそうした人たちの救いやよりどころになる。この映画は、人は社会の地位や身分と関係なく誰もが弱さを持っていて、それゆえに人と人は支えあっているかねばならないとのメッセージを発している。

いま、私たちはコロナ禍の中で、人と人の関係の難しさに直面している。寅さんは、そんな中でも誰かを敵視せず、互いに支え合えと私たちに伝えるのだ。

(静岡文化芸術大学教授)

2020.9.7

中日新聞（朝刊）P.7